



2009年4月8日放送

漢方頻用処方解説「葛根湯」①

北里大学東洋医学総合研究所 漢方診療部 副部長 鈴木 邦彦

葛根湯というのはご承知のように、数ある漢方処方の中で最も有名な処方のひとつで、葛根湯といえばかぜ薬として大変有名であります。これほど多く用いられ、切れ味もよい薬ですが、無批判にこれを用いる医者は「葛根湯医者」と言われ落語のネタとされております。やはり本来の治療効果を挙げるためには、その正しい使い方を心得なければなりません。

まず葛根湯の「証」を簡単に解説すると、表実（ひょうじつ）でその実が項背部の緊張として現れるか、或いは体表部の限局性緊張として現れるかであり、熱を伴う場合と、そうでない場合とがあります。

出典と処方名の由来ですが、出典は中国・後漢時代の末、3世紀初頭に張仲景（ちょうちゅうけい）があらわしたとされている『傷寒論』（しょうかんろん）です。今日行われている漢方治療の原点は『傷寒論』と『金匱要略』（きんきょうりやく）という二つの古典にあり、この二書が、現在も価値を減ずることなく生命を保ち続けているということは、世界の科学史の上で類をみない驚くべき事実であると言われております。

仲景はこれらの書物を書いたとき、以前から伝わっていた処方の多くに、その主薬の生薬の名前で新たに命名をした、といういいつたえが敦煌（とんこう）から出土した医学書にみられます。実際『傷寒・金匱』には主薬で命名された処方が多く、葛根湯もその例で、

桂枝（けいし）・芍薬（しゃくやく）・甘草（かんぞう）・生姜（しょうきょう）・大棗（たいそう）の5味で桂枝湯（けいしとう）が成り立ち、これに葛根（かっこん）が加わった6味は桂枝加葛根湯（けいしかかっこんとう）となり、さらに麻黄（まおう）も加わって7味となると、もはや桂枝加葛根麻黄湯とは言わず、新たに葛根湯の名が与えられています。この主薬による命名は仲景に限らず、その後も広く用いられ、5世紀後半の『小品方』（しょうひんほう）には12味の葛根湯、7世紀前半の『崔氏方』（さいしほう）には葱白（そうはく）・豆豉（ずし）・葛根からなる3味の葛根湯、7世紀中頃の『千金方』（せんきんほう）には13味の葛根湯もあります。単に葛根湯といえ、ふつうは張仲景の葛根湯をさします。

次に条文の解説をいたします。

『傷寒論』太陽病中篇に「太陽病、項背強ばること几几（きき）、汗無く悪風（おふう）するは葛根湯之を主（つかさど）る」（太陽病項背強几几無汗悪風葛根湯主之）。解釈ですが、『傷寒論』における太陽病とは、かぜなどの発熱性疾患初期で、頭痛、項の強張り、悪寒、脈浮などの徴候がある状態を言い、この条文の大意は「葛根湯は、太陽病の状態、項背のこりが強く、汗が無く、また風に当たると寒気がするなどの症状を呈するものに用いる」ということであります。

二つ目の条文は、やはり『傷寒論』の太陽病中篇に「太陽と陽明の合病は必ず自下利（じげり）す。葛根湯之を主る」（太陽輿陽明合病者必自下利葛根湯主之）とあり、『方術説話』（荒木性次先生）の解説を参照しますと、「太陽は表（ひょう）を主り、陽明は裏（り）を主る。太陽の気は表より発せんとし、陽明の気は下（げ）より出でんとす。いま太陽病みてその気表より出るを得ず。表より出るあたわざれば、その気裏に回る。裏病まざれば下部の固め強くして裏より出るを得ずして再び表に帰る。しかるに今、陽明病みて下部の固め弱し。ゆえに気下より漏れて下痢を生ず。これをもって太陽と陽明の合病のものは必ず自下利するといふ。而して、その気はもっぱら表にあり、表を發してその気去れば裏もまた整うことを得、ゆえに葛根湯これを主るといふ」と解説されています。

三つ目の条文といたしましては、『金匱要略』痙湿暍病篇に「太陽病、汗無くして小便反って少なく、氣上って胸を衝（つ）き、口噤（こうきん）し、語ることを得ず、剛瘕（ごうけい）を作（な）さんと欲す。葛根湯之を主る」（太陽病無汗而小便反少氣上衝胸口禁不得語欲作剛瘕葛根湯主之）。解釈といたしましては、痙病は通常は筋肉の異常緊張を伴う疾患であり、破傷風が想定されております。ここにみられる症状は、破傷風による角弓反張（かくきゅうはんちょう）の状態であり、これに葛根湯が用いられるという記載であります。口禁は口が開かないということで、そのために会話ができないと解釈でき、必ずしも破傷風でなくてもこうした状態に用いてよいということでもあります。

以上、条文には、脈状の記載はありませんが、言うまでもなく脈は浮でかつ緊であることが多くあります。

構成生薬の解説ですが、葛根湯の構成は、「葛根四両、麻黄三両節を去る、桂枝二両皮を去る、生姜三両切る、甘草二両炙る、芍薬二両、大棗十二枚劈（つんざ）く。以上七味を

水一斗を以て先ず麻黄、葛根を煮て二升を減じ、白沫を去り、諸薬を内（い）れ、煮て三升を取り、滓（かす）を去り、一升を温服す。覆（おお）って微似汗（びじかん）を取り、餘は桂枝の法の如く将息（しょうそく）及び禁忌す。諸湯皆これに倣う」とあります。

『臨床応用 漢方処方解説』（矢数道明）の方解には、葛根湯は「桂枝湯から桂枝、芍薬を減量し、葛根と麻黄を加えたものであり、また、麻黄湯から杏仁（きょうにん）を去り葛根、大棗、生姜を加えたものである。」葛根湯の「主薬は方名のように葛根で、血滞による筋攣縮を寛解し、麻黄と桂枝と組んで表を発し、他はこれらの補助薬である。生姜は表の気を順（めぐ）らし、甘草は諸薬を調和させる。芍薬は葛根とともに血を順らし、筋肉の攣縮をやわらげ、大棗は上部を和し、かつ潤す。葛根には...（略）筋肉の拘攣を寛解させる...（略）作用がある」と解説してあります。

古医書による記載としては数多くありますが、尾台榕堂（おだい ようどう）の『類聚方広義』頭注（るいじゅほうこうぎ とうちゅう）にも多くの使用法が解説されており、その一部を紹介します。

「葛根湯は項背強急するものを主治する。ゆえに驚癇、破傷風、産後の感冒卒瘕、痘瘡の初起（期）など、角弓反張（かくきゅうはんちやう）、上竄搐搦（じやうざんちくじやく）、身体強直するものをよく治す。証に従って熊胆（ゆうたん）、紫円（しえん）、参連湯（じんれんとう）、（三黄）瀉心湯（しゃしんとう）などを兼用すべし。

また、「葛根湯は麻疹の初期に悪寒、発熱、頭項強痛、汗無く、脈浮数、あるいは乾嘔、下利（痢）するものを治す。熱が盛んで咽喉刺激、心胸煩悶するものは黄連解毒湯（おうれんげどくとう）を兼用する。」

また、「疫痢の初起（期）に発熱、悪寒、脈数のものはまず本方（葛根湯）を用い、温覆（おんぷう）をして発汗させる。もし吐があれば葛根加半夏湯（かつこんはんげとう）で汗を去り、後に大柴胡湯（だいさいことう）、厚朴三物湯（こうぼくさんもつとう）、厚朴七物湯（こうぼくしちもつとう）、大承気湯（だいじょうきとう）、小承気湯（しょうじょうきとう）、調胃承気湯（ちやういじょうきとう）、桃核承気湯（とうかくじょうきとう）、大黄牡丹皮湯（だいおうぼたんぴとう）、大黄附子湯（だいおうぶしとう）を各々の証に従って用い、裏熱、宿毒を疎蕩（そとう）すべし。」

また、「葛根湯は咽喉腫痛、時毒疔腮（じどくささい—これは流行性耳下腺炎のことです）、疫眼（えきがん—これは“はやり目”のことです）で焮熱腫痛（きんねつしゅつう）し、項背強急、発熱、悪寒、脈浮数のものを治す。桔梗（ききやう）、大黄（だいおう）、石膏（せつこう）を選んで加味、あるいは応鐘散（おうしょうさん）、再造散（さいぞうさん）、瀉心湯、黄連解毒湯などを兼用す」。以上のような記載があります。